さかなの命

「早く、早く。さかながいっぱいいるよ。」

ぼくは、むちゅうでため池の中をのぞきこみました。そこにはエビやフナなどがむれをなして泳いでいたのです。池の岸をしゅう理する工事のために、水をぬいていたのは知っていましたが、もうほとんど水がないと聞き、父といっしょに見に来たのです。少し後から来た父も、

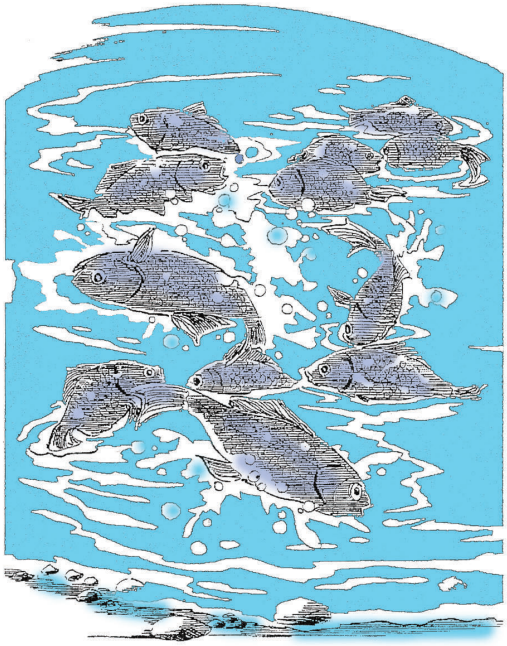
「すごい。こんなにたくさんのさかなを見たのはひさしぶりだ。」

と、びっくりしています。

ため池は、深さ十〜十五センチメートルぐらいしかなく、大きなフナなどは、バタバタと苦しそうにはねていました。

ぼくは、さっそく池の中に入り、あみでさかなをすくい上げはじめました。

いつもなら、水音がしただけで、さっと向きを変えるのですが、今日は水が少ないためか、あまり元気がありません。手でもつかめそうです。



そっと近くまで行き、さっとあみをすくい上げてみました。

「やったあ。たくさんとれてる。」

あみの中でエビやフナなどがびんびんとはねています。すばやくバケツの中に入れました。その後も、むちゅうでさかなをどんどんとり続けました。しばらくしてふと気がつくと、バケツの中はさかなでいっぱいです。ぼくはうれしくて仕方がありませんでした。

家に帰ると、さっそく母や妹に見せました。

「たくさんいたんだね。でも、もうにがしてやれば・・・。」

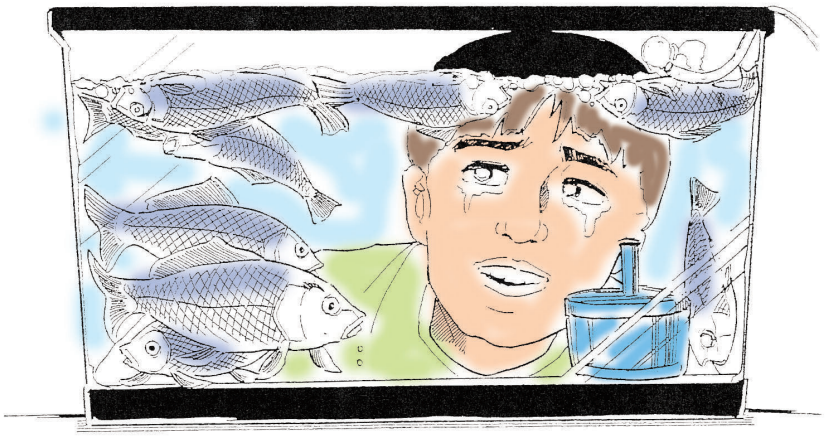
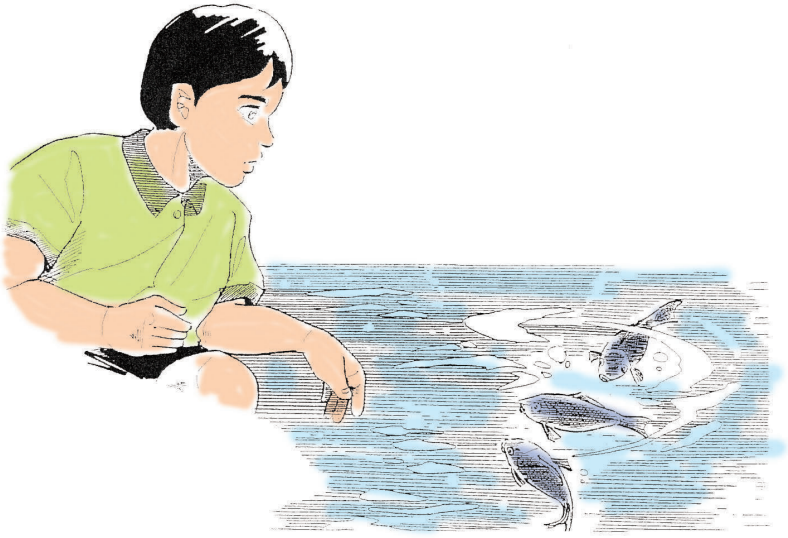
「いやだよ。せっかくつかまえたんだよ。きちんと世話をするから、かってもいいでしょう。お父さん。」

何度もたのんでやっとかうことをゆるしてもらいました。

ぼくは、水そうに水を入れ、エアポンプを入れました。さかなの数からすると、水そうが少し小さいかなと思いましたが・・・。

一日目は何度も様子を見に行きました。でも、しだいにぼくの頭の中からさかなたちのことはうすれていきました。そして六日目の夕方、えさをやりに行くと、さかなたちがほとんど死んでいたのです。よく見ると、エアポンプのホースがはずれていました。しばらく見に行っていなかったので気がつかなかったのです。急いで水そうの水をかえてみると、三匹のさかなが生きていました。

ぼくは、生き残ったさかなを見ているうちに、なみだがこぼれてきました。そして、ぼくが今までかっていたカブトムシやハムスターなどの動物たちのことを思い出していました。



次の日、生き残ったさかなたちを水の多い池に返すことにしました。家族にそのことを話すと、みんながさん成してくれました。ぼくは、三匹のさかなたちがすめそうな池をさがして放してやりました。そのとき、水の中に入ったさかなたちが、ぼくをじっと見て、何か言っているような気がしました。